

Quantifying Social Learning Strategies, Ceramic Specialization, and Idiosyncratic Style:A Geometric Morphometric Examination of Yayoi Period Earthenware, Japan

ジェームズ, ロフトス

<https://hdl.handle.net/2324/5068282>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (学術) , 課程博士
バージョン :
権利関係 :



氏 名	ジェームズ ロフトス (James LOFTUS)			
論 文 名	Quantifying Social Learning Strategies, Ceramic Specialization, and Idiosyncratic Style: A Geometric Morphometric Examination of Yayoi Period Earthenware, Japan (社会学習戦略、土器専門化、特異様式の数量化的研究：日本弥生土器の幾何学的形態学的研究)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	溝口孝司
	副 査	九州大学	教授	宮本一夫
	副 査	九州大学	准教授	田尻義了
	副 査	九州大学	准教授	藤岡悠一郎
	副 査	岡山大学	教授	松本直子

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、「社会的学習理論 (Social Learning Theory)」を考古学的物質文化のパターン形成とその変容の説明・理解に応用する。当該理論の根幹は、行動パターンの再現のための直接的指導を通じた強化が伴わない「観察」や「指示」のみからでも、「学習」が起こり得るという認識である。考古学においては、これまで主に考古民族誌的観察を通じてこのことを実証し、それに基づき物質文化のパターン形成にいかなる学習モードが関与するのかを復元することが試みられてきた。しかし、特定の学習モードがどのような社会文化的条件の中で創発・構造化されるのか、またその変容のメカニズムとはいかなるもののかについてはこれまで十分に深められることがなかった。当該論文はこれらの点につき、弥生時代開始期(「早期」)・前期の福岡平野地域の土器を対象として解明を試みた。

北部九州地域の弥生時代早期・前期の福岡平野地域においては、朝鮮半島南部地域からの、水田稲作を主要生業とする集団の比較的小規模な移動が累積し、そのもたらした多様な文化要素が在地居住集団との接触融合を通じて選択的に導入されることを通じ、独特な「弥生文化」が形成された。この過程はまさに、新たな社会・文化的条件の生成のもとでの、物質文化の新たな学習・伝習モードの生成過程であり、その具体的な復元は特定の社会文化的条件と特定学習モードの創発・構造化の相関性、またその変容のメカニズムの検討に直結するものである。このような認識に基づき、北部九州弥生時代早期・前期土器の形状を定量的に把握・検討することで、生産組織、様式的行動の特異性、それらを基盤的に形成しその構造化を媒介した社会的学習戦略の復元をおこなった。

上記のような分析の結果、弥生時代開始期から前期に至る期間を通じて、多様なレベル(特定部分形態・個体全体形状・整形技術)を横断する土器スタイルの標準化が進行していることが明らかとなった。また、この過程は土器生産量、遺跡密集度の増大と高い相関を見せ、土器スタイルの学習・伝習モードが小規模な家族集団内におけるそれから、より大規模な集団内部におけるより専門性の高い製作者集団単位の学習・伝習モードへと移行したことを示すことが明らかとなった。これらを通じて、特定製作者群による反復的相互模倣と伝習を通じた土器様式の標準化は、人口の急速な増大による社会集団分化、それら相互の機能分化と相互関係の複雑化・複合化を背景とすることを明らかにした。

以上の成果は、当初にのべた「社会的学習理論」の考古学への適用の今日的課題点を解決し、同分野の発展に貢献するものであり、博士(学術)の学位に値すると認められる。